ちょっと不思議でカラフルなおはなし

オオスカシバ

読者のみなさんこんにちは。そして今知ったよ！　という方、はじめまして。わたくし、子育てブロガーで三児の母、こきあと申します。年長で三つ子の長男べに丸、次男のむらさ吉、そして長女のきい奈（それぞれ仮名）との日常について記事を書いています。どうぞよろしくお願いします。

家族の紹介
母　こきあ
父　めろん
子供たち
長男　べに丸
次男　むらさ吉
長女　きい奈

現在は特別企画として、みなさんから寄せられた質問に答える形で記事を書いております。今日からは、若葉生えたての桑さん（十代男性、学生）から頂いた、「お子さんの仮名に色の名前が含まれているのはなぜですか？　[illegible]の由来等ありましたらぜひお聞きしたいです」という質問にお答えしていきたいと思います。最近は子育て世代以外の読者さんも増えているようでうれしいですね。

ちょっと不思議でカラフルなおはなし①

子供って大人には見えないものが見えたり、意味深な発言をすることありますよね。実は私たちこきあとめろんも、子供たちから前世の正体を打ち明けられたことがあるのです。これが色と関わってくるんですよ。

前置きはこの辺にしておいて、本題に移ろうと思います。文章自体がヒントになっているので、三人が一体何者だったのか、みなさんもぜひ考えながら読んでみてくださいね！

時は遡って七年前。真夏の朝に三人は生まれました。その日は眩しいくらいに晴れていました。予定では深夜ごろ誕生だったのですが、どういうわけか出てくるのをしぶって、そのまま夜が明けてしまったんですね……でも、前世の正体的に光がないと生まれてこられなかったと思うので、今ではこの数時間の遅刻をすっかり許してあげています。（別にもともと怒っていたわけではありませんが）

生まれたての赤ん坊のころには本当に手がかかりました。これも納得できるんですよね。前世では生育初期が一番苦労するらしいですから。もう、一人が泣き出せばドミノ倒しのように二人目、三人目と泣き出す。三人だ

から板は三枚だけのはずなのに、途方に暮れてしまって私からしたら三千枚倒してしまったような絶望感に襲われましたね……夫めろんの観察によって、雨や乾燥で湿度が大きく変化したときに泣くという説が導き出されたのですが、こきあ的には偶然なんじゃないかって思ってましたね。(信じるか信じないかはあなた次第！)他にも、ミルクや離乳食へのこだわりが強くて、ちょっとでも調合時の配分を間違えると飲み込んでくれないこともしばしば。おかげで体重もめまぐるしく変化するものだから、検診でお医者さんにネグレクトを疑われやしないだろうかと心配していました。(笑)

ちょっと不思議でカラフルなおはなし②

前世と同じで、ある程度成長してからはさほど手がかからなくなりました。ええ、もう優等生と言っても過言ではなかったと思います。(親バカ全開)三歳になった頃でしょうか。さすがにまだ早いかと思いお手伝いはさせていなかったのですが、なんと子供たちの方から求めてきたのです。びっくりでしょ！　はじめは窓際の小さな鉢植えに興味を示すようになり、「あれにお水あげたい」と言い出したのです。三人でローテーションを組んであげたのですが、誰一人として順番を間違えたり、忘れることなく続いたので感心しました。もう一度言いますが三歳児ですよ！　この子たちの六倍は生きている私ですら回覧板回すの面倒で仕方がないのに……脱帽でございます。もうすぐ小学生となった今では、お皿洗いとか風呂掃除がお気に入り。とにかく水を扱う系が好きなんですね。冬場は手が荒れるし若いのにに任せちゃいたいのが本音ですが、あくまでお手伝い。基本的にこきあやめろんがやってます。うう、ハンドクリームを恵んでください……

ちょっと不思議でカラフルなおはなし③

もちろん、三人ともちゃんと子供らしさがあり、もう見ていてずっと飽きないくらい癒されまくっています。(親バカ再燃)というわけで一人ずつイチ押しエピソードを紹介していきますね。

まずは長男のべに丸から。彼はリーダーシップがあり、人をまとめたり手助けするのが得意なタイプで、周囲からは小さなヒーロー的存在として見られています。幼稚園の先生からも、「今日べに丸が誰それにこんなことしてるのを見てほっこりしました」という連絡を受けることも多く、母として嬉しい限りです。肝も据わっていて、遊園地に行けばお化け屋敷や絶叫マシンでも、私たちの

腕を引っ張ってまで乗ろうとするんです。勘弁しておくれ……

　そんなヒーローに災難がふりかかったのは、幼稚園で絵本の読み聞かせをしてもらっていた時のことでした。蝶の幼虫が色々なエサを食べて大きくなっていく様子を、食の大切さと結びつけたストーリーだったのですが、彼は変に深読みをしてしまったようです。ざっくり絵本の展開をまとめると、始めは小さくて食の細かった幼虫が、成長するごとに自分より大きな葉っぱを食べることに挑戦、ラストで「今度は立派なスイカを食べたいな」とつぶやいて終わる感じです。べに丸ったらこれを聞いて、いずれ自分も巨大化した幼虫に食べられてしまうのではないかと思い、怖くて号泣してしまったそうです。そしていつもは助けてあげていたお友達にいい子いい子されていたとか。実は彼、もともと虫が苦手なんです。まだ現実とフィクションの概念を理解できていなかったようですね。そのギャップ、いいぞ！　頑張れ小さなヒーロー君。

　続いてむらさ吉。彼はべに丸と対照的に引っ込み思案で臆病者です。確か彼が五歳になる夏のある日のこと。昼間は晴れていたのに、午後になるとみるみるうちに黒雲が天を覆いつくし、豪雨に見舞われました。そして雷がドーン！　またドーン！　べに丸ときい奈はへっちゃらだったのですが、むらさ吉ったらへそをとられる話を信じこんでいて、その日は夜まで布団に潜り込んで過ごしていました。この暑い夏に頭まで！　これがもうキャンプでもするのかってくらい気合が入ってて、水分補給用のスポドリや暇つぶし用のおもちゃだけでなく、暑さにやられぬようにちゃっかりハンディ扇風機を用意し、そして賢く懐中電灯まで忍ばせておりました。

　私たちは彼のことを笑って見ていたのですが、日の沈んだ頃にまさかの停電。外は雷が現在進行形。我が家のピンチ―ヒッター懐中電灯は雷嫌いな布団の主に監禁されているからさあ大変。私たちはパニックになってしまい、慌ててむらさ吉を引っこ抜いて回収しようと思ったのですが、さすがにかわいそうなのでスマホのライトで我慢したのでありました。その後も全身埋まっていた彼ですが、非常食のスナック菓子を開ける音が聴こえるや否や、目が覚めたように飛び出してきましたとさ。食べ物には目、いや耳もないむらさ吉。お前ってやつはかわいいのお。

　最後はきい奈。彼女は砂場遊びが好きで、泥団子職人なのです。うちの幼稚園では砂場での泥団子づくりがブームとなり、きい奈もハマっていました。最初は作ってその場で満足して終わりだったのですが、ある時から先生に入れ物を作ってもらって、壊れぬよう丁寧に持ち帰ってくるようになりました。これがびっくり、ちゃんと家族全員分あったんですよ。みんなで食べてねってこと

だったみたいです。めろんなんかもう嬉しくてうれしくて仕方がなかったらしく、裏声出して感謝しながら食べるまねを熱演しておりました。これがモチベーションになったのか、お絵かきのときに新メニューの絵を用意して、翌日作ってくるようになったんですよ。白砂をふりかけた砂糖団子、手作りの国旗を刺したお子様団子、雪に包んだ冷凍団子、本当にいろいろなメニューを開発していて、娘が帰ってくるのが楽しみで仕方ありませんでした。卒園してしまうとお土産ももらえなくなるので、寂しい限りです。

このように、三つ子とは思えないほど性格はバラバラで個性豊か。三つ子の場合、大体は同性の二人が一卵性で似るんですけどね……やっぱりうちの子たち、不思議な生き物ですね。

ちょっと不思議でカラフルなおはなし最終章

盛大にヒントを振りまくことができたと思うので、そろそろ正解発表に移りたいと思います。しかし私、文才はないので結論を書きだすまでにだらだら伸びてしまいそうです。ご了承下さい。

衝撃の告白の時は、あまりにも突然にやってきました。いつだったかとうと、子供たちが四歳になった頃、私がブログを始める少し前でした。

夏休みの旅行先は海が有名な観光地で、海水浴を楽しんだり水族館なんかに行きました。ところが人気が高いので近くのホテルは満室ばかり……そこで、街からさほど遠くない大きな市にホテルを取り、電車で目的地まで向かうプランにしていました。実は、そのホテルを取った市ですが、私が通ってた大学のあるところなんですね。

夕方ホテル入りして海は翌日。時間もあったため私がいろいろと街を紹介しながらドライブして時間を潰すことにしました。子供たちは退屈かな？　とも思ったのですが、意外や意外、三人とも私の大学を見たがったのでそっち方面を散策しました。お腹が空いてきたので夕飯は近場のラーメン屋で済ましたあと、すぐにホテルに戻ろうと思ったのですが、車に乗った後でむらさ吉がトイレに行きたがったんですね。何でさっき言わなかった！子供あるあるですね。本当に勘弁してほしいです。

そこで、当時よく買い出しに行ったスーパーに行きました。なんか申し訳ないので、ついでに海岸でつまめそうなお菓子でも買っていくことにしました。

みなさんこういう時って子供はどうしていますか？うちはやはり犯罪被害に遭わせたくないので、なじみの店でも一緒に行動させています。そのおかげか警戒心がつき、知らない場所で勝手に走り回ってしまうことがないのですが、この日は入ったとたんに走り出してしまっ

たのです。お菓子を買うことを知っていたので、はしゃいでしまったのかもしれない、私は反省しました。
　ところが、彼らが向かったのはお菓子コーナーではなく地産地消コーナーでした。そして、手を振ったりその場で飛び跳ねていて私を呼んでいるように見えました。一体どんな魅力的なものが陳列されていたのだろうかと思い、カートを急いで引いていきました。

「お母さん、これ買って！」
　むらさ吉が抱えていた袋の中には、ニンジンが入っていました。色違いの数品種が一本ずつの詰め合わせになっているものです。うちの子たちはそろってニンジンが嫌いなので、なぜこんなものを欲しがったのか理解できませんでした。確かにカラフルで子供ウケはよさそうなので、ひょっとしたら珍しい果物と勘違いしている可能性も考えられます。そこで、
「これすごい色しててマズそうだけど、ちゃんと食べられるの？」
　と聞いてみました。すると、むらさ吉はすねたように口を膨らませました。そして、
「お母さんの嘘つき」
　と言い放ったのです。「嘘つき」。私は自分自身が嘘をついていることは知っていました。というのも、学生のころ同じ商品を何度も買っていて、このニンジンたちがおいしいこともよく知っていました。しかし、この子たちにカラフルなニンジンの話はしたことがないので、嘘を見抜かれたことには疑問を抱き、寒気さえ感じました。怪談や肝試しの盛んな季節ってこともありまして……うちの子供たちはエスパーなのかと思いましたよ。
「お母さん、このニンジンおいしい美味しいって言って食べてたの覚えてるよ」
　きい奈が目を細めて笑みを浮かべていました。
「俺たちずっと一緒だったもんな」
　べに丸の言葉に、すねていたむらさ吉も頷きました。私は何が何だか分からなくて、とうとうこう聞いてしまいました。
「ずっと一緒だったってどういうこと？」
　すると、三人は一瞬顔を見合わせた後、べに丸が代表して真相を語り始めました。
「俺たち、このスーパーで売られてたカラフルニンジンの詰め合わせだったんだ！」
　べに丸が暴露すると、むらさ吉は袋をカゴに放り込みました。どうやら長男が赤い金時ニンジン、次男が紫ニンジン、そして長女が黄色い金美ニンジンで、三本で一つの袋の中に入っていたそうです。つまり、三人は人間になる前から同じ農園で生まれ集まった兄妹みたいなものだったというわけです。
「でも僕たちなかなか売れなくて、もうちょっとしたら

捨てられちゃうところだったんだ。やっぱりみんなオレンジのやつじゃないと買わないみたい」
　むらさ吉が寂しそうな顔を見せました。
「でもね、お母さんが買ってくれたんだよ！」
　きい奈が私の手を握りながら言いました。その手の温もりに、私は冬の寒い中で自炊を頑張っていたことを思い出しました。そして、そんな無機質な日々を彩ってくれたのが彼らだったということも。
「俺、お母さんに炊き込みご飯の具にしたもらったな。寒そうにしてたお母さんをあっためてあげたんだけどどうだった？」
「僕は茹ででもらったよ。色素が麺にしみこんでダークネスなパスタになっちゃったけど、お母さん嬉しそうに食べてくれたから幸せだったな」
「私はサラダだった！　いろんな色の葉っぱでおしゃれできて楽しかったよ」
　炊き込みご飯にパスタにサラダ……かつて作ったことは覚えていました。オレンジ色の五寸ニンジンでも大丈夫だけれど、特別なニンジンでつくった料理はいつもよりおいしそうに見えて、料理を頑張ろうと思えるようになったし、得意料理になったことで出会った夫の好物にもなりました。つまり、私たちの家庭は彼らとの偶然の出会いによって生み出されたというわけです。
「お母さん、みんなにもう一度会えて嬉しいよ」
　私はそう感謝の思いを伝えると、三人をその場でぎゅっと抱きしめてしまいました。そこがスーパーであり、人目があることも忘れて！
「へへ。俺が神様に、生まれ変わってもいつか三人そろってお母さんのところに行けるようにお願いしておいたんだ。偉いでしょ」
　べに丸が誇らしげに種明かしをしていました。本当によくやってくれた！　ファインプレーです。
　ところでめろんはどこにいたかというと、むらさ吉のトイレを見守っていた時にお腹を下してしまい、彼を私たちのところに向かわせた後はトイレに籠っていました。（笑）そして私たちの秘密は、子供たちの意向でその時には秘密にしていました。だからこのブログを見て初めて真相を知ることになると思います。そしてニンジンの口実は……ただのお土産ということにしておきました。ええ、母子にとって思い出の架け橋なのですから、どんな銘菓よりも優れたお土産であることに嘘はないのですもの。そして子供たち、五寸ニンジンは嫌いで食べないのにカラフルニンジンはペロリと平らげてしまいました。きっと人気者の彼らをライバル視してるからなのでしょうね。ちなみにどうやって食べたかと言うと、例の当時作った炊き込みご飯、パスタ、サラダを再現してみたんです。あとでレシピも公開する予定です。子供たちも手伝ってくれて、一人暮らしで寂しく自炊していたころと

は大違いでした。出会いに感謝です。

以上、ハンドルネームの由来についてでした。いやあ、まさか子供たちの前世が、昔たまたま購入した訳アリニンジンたちだったなんてびっくりでしたよ。しかも出会っていたなんてね。美味しく食べてもらえて喜んでいたけれど、我が子に包丁入れて熱々の鍋に放り込んだなんて考えると、なんだかね……とも思っちゃいますがね。（笑）

ところでみなさん、ヒントは役に立ちましたか？　一応解説していこうと思います。

まず①の回。ニンジンは発芽に光を必要とするため、三人は夜を超えて朝に生まれてきたのだと考えられます。そして、「発芽させることができれば栽培成功」と言われるほどニンジンは発芽率が低いとされています。だから生育初期、つまり赤ちゃんの頃は無駄に手がかかったんでしょうね。食にうるさかったのも、野菜が養分の偏りに敏感だからじゃないでしょうか。

次に②の回。ここは特に知識なくても読み取れたんじゃないかと思います。植物なので水は好きだったんでしょうね。

続いて③の回。ニンジンの害虫として代表的なのはキアゲハの幼虫。葉を食べてしまうんですね。そして布団にもぐったむらさ吉の姿は、まるで葉っぱの付け根まで土に埋まったニンジンですね。そしてきい奈が泥遊び好きなのも、ニンジンが土に縁のある野菜だからじゃないでしょうか？　生まれ変わっても前世の面影って残るんでしょうね。（科学的根拠はありません）

さいごに

みなさんのお子さんも、時に嘘くさいことやファンタジーな発言をしてきて、忙しかったりすると冷たく聞き流してしまうこともあるのではないでしょうか。けれど、不要な話だと思う時こそ彼らに真剣に向き合ってみると、思わぬ発見が得られ、親子の絆を再確認できるきっかけになるのではないかと私は考えています。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

「ふう、最終章の投稿終わった」

母親はパソコンをシャットダウンさせると、大きく伸びをした。窓の外でカラスが鳴いているのが聴こえた。続いてガラガラと補助輪つきの自転車が帰っていく音。夕方の音たちが今日という物語のエンドロールを彩っているようだ。けれどもこの後は洗濯物の取り込みに夕飯

の支度。記事を書き終えてもまだまだ母の仕事は終わらない。
　母親は家事をするべく自室を出てリビングに向かうことにした。最後の登園を終えた三人は、仕事の間リビングで仲良く遊んでいた。
「ほら、そろそろ三十分経つし、ゲーム終わりにしようぜ」
　家族のルールに乗っ取って、長男の熱志が優誠と光琉を説得していた。母親はそれを聞くと、敢えて部屋に入らず、様子をうかがうことにした。二人はどうするのだろうか。
「えー、もうちょっと時間あるし、もう一回戦やろうよ」
　優誠はどうも諦めきれない様子だった。
「ゆうちゃんだめ。今から始めたら絶対三分で終わらないもん」
　光琉が軌道修正を試みた。
「ひーちゃんの言う通りだよ」
「もー、しょうがないな」
　二対一に分かれて勝ち目がないと見切ったのか、ようやく終了を受け入れた。聞いていた母親は喧嘩にならないかと胸をざわめかせていたが、思っているより我が子が大人であることを知って安堵した。そして、何も聞いていなかったかのようにゆっくりとドアを開けた。
「お母さん、今日のご飯何？」
　台所で支度を始めた母親のもとに、甘えん坊の優誠が近寄ってきた。
「今日はみんなの大好きなカレーだよ。ほら、ちゃんとカラフルニンジンも入れるよ」
　籠の中から三色分取り出して見せると、彼は目を輝かせて顔を近づけた。
「え、本当？」
　その声を聞きつけて、他の二人も駆け込んできた。
「俺切ってみたい！」
「私も！」
「ずるい、僕だって！」
　三人とも、流しの縁に両手をついて前のめりに申し出た。まるで土をかき分けて伸びていくニンジンのように明るい色の意欲が湧き出している。
「包丁はちょっと危ないからな……よし、代わりにピーラーで皮剥くの手伝ってもらおうかな」
「わーい！」
　なんでも希望を叶えてあげられるわけではないけれど、頑張って伸びようとしている芽は摘まずに、なんとか工夫して育てていくように心がけている。
「わっ、手に汁が付いた」
「ホントだ。紫になっちゃったね」

「落ちないよー。僕ずっと手が紫なのはいやだ。僕もうニンジンじゃなくて人間だもん」

前世では紫だったはずなのに嫌悪している優誠を見て、母親はクスっと笑った。彼女によって炒められている鍋の中の甘い宝石たちも、カラカラ音を立てて楽しそうに踊っていた。

そう、彼らは人間だ。スーパーに売られることもなければ、買われずに捨てられることもない。しかし、春からピカピカの一年生として、小学校という社会に出荷されて、他の児童という野菜たちと並ぶことになるだろう。彼らと時に対立したり、競争して負けることだってあるだろう。前世でオレンジの五寸ニンジンにかなわなかったように。でも、そんな時に三人に秘められている個性を見つけて認めてあげたい。そして、それが他人にはない持ち味だと理解し、自信を持って歩きだしてほしい。見向きもされなかった彼らを買い取って立派な料理として輝かせた若かりし日々のように、どんな時でも彼らの味方であり続けようと母親は誓うのであった。